



木の駅に木材を出荷しようと順番を待つ軽トラの列

木の駅プロジェクト始動

特集

林内に放置された間伐材などを地域通貨と交換し、地域活性化を目指す「木の駅プロジェクト」が東城地域でスタートしました。今月は、森林（もり）の再生と新たなまちづくりの形、新たな地域振興策と期待されるこの取り組みに迫ります。

東城地域の取り組み

東城地域では、東城地区の各自治振興区や林業関係者などで組織する「東城木の駅実行委員会」が主体となり進めていきます。

出荷者はまず、事前に実行委員会に登録します。間伐などで切り捨てられていた林地材を軽トラックに積み込んで、東城町内5カ所に設置された木の駅に持ち込みます。買い取りの対象となる木材は、町内の山林で過去1年以内に伐採されたスギ・ヒノキ、実行委員会が認めるマツなどの天然木で、長さ0.5〜2m、末口（細い方）が5cm以上で枝払いしたもの。実行委員会が1ト当たり6千円（うち3千円を市が補助）で買い取り、地域通貨「里山券」を発行します。本年度3百トの出荷を見込んでいます。

里山券は実行委員会に登録した店舗（8月21日時点で64店舗）で、一枚1千円から利用できます。



8月1日の初出荷の様子。軽トラックで運び込んだ木材を出荷者ごとで土場に降ろし、立て札を設置



「木の駅プロジェクト」に取り組む理由

荒れた山を何とかしたい

昨年9月、市政懇談会東城会場の地域テーマとして「森林を活かしたまちづくり」が提案されました。「この議論が木の駅プロジェクトスタートへの契機になった」と語るのは、帝釈自治振興区会長で東城木の駅実行委員会委員長を務める表良則さん。東城町自治振興区連絡協議会として地域課題のテーマを絞る際、森林を活用した地域づくりが議論の中心になったのだといいます。それは、山林を抱え

る地域住民の中には、山が荒れ放題になっている状況を何とかしたいという思いがあり、集まったメンバーが共通して持っていた思いでもありました。「みんなが山に関心を持たない現状がある。昔のように山への関心を持ってもらい、もう一度山に足を向けてほしい」。そのひとつの手法として着目したのが、木の駅プロジェクトでした。「この取り組みで、放置された間伐材などが活用され、山の手入れが進む。林業の再生につながるれば」と期待します。

「木の駅プロジェクト」を知る

木の駅プロジェクトとは、地域にある森林資源を活用した地域活性化のための仕組みづくりを目的にした、国内の40以上の地域で導入されている取り組みです。

「木の駅」とは木材の集荷場所を指し、ここに木材を出荷しようとする人が間伐材や

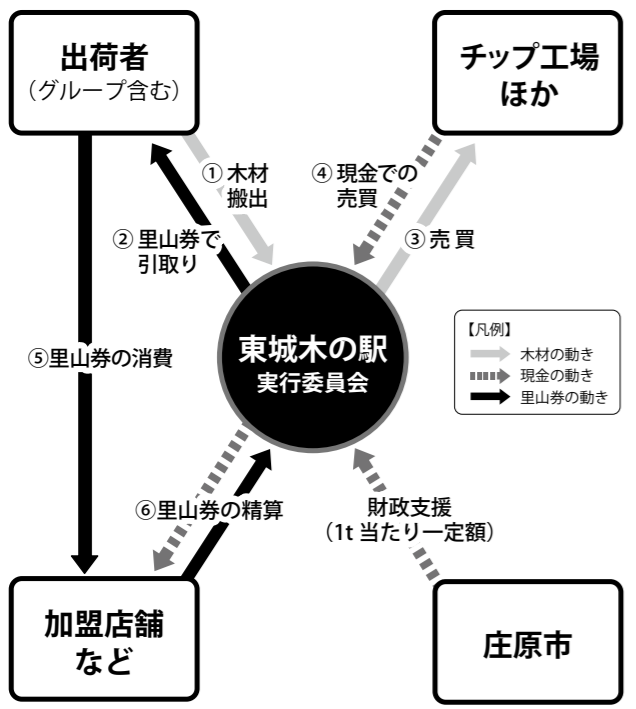
林地残材などを運び込みます。集荷された木材はチップ工場などが買い取り、その量に応じて地域通貨を出荷者に交付します。出荷者はこの地域通貨を加盟する店舗などで利用して買い物ができるというシステムです。

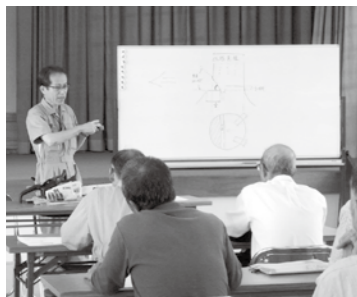
地域通貨で経済活性化を

「実は商工会では、地域経済の活性化に向けて地域通貨を勉強しはじめていたところでした」。東城町商工会事務局長の藤原富雄さんは、地域通貨が流通する木の駅プロジェクトの取り組みに大きな期待を寄せている一人です。以前から農商工連携、6次産業化を進める議論を進めていた東城町商工会では、林業ともつながれないかと議論を進めていたといいます。「木を商と結び付けられないかとい

う話もしていたので、このプロジェクトの話は本当にいいタイミングでした」と話します。実行委員会の設立に向けた準備委員会が立ち上がった段階から、藤原さんはオブザーバーとして参加。3月4日の理事会で商工会として正式にプロジェクトへの参加を決めました。「地域通貨の導入は経営の厳しい小さな店舗の支援につながるはず。商工会としてもこの取り組みを必ず成功させたい」と意気込んでいます。

木の駅プロジェクトのイメージ





7月28日には出荷登録者を対象にした伐採造材研修を実施。この研修ではプロジェクトの出荷要件にあわせたプログラムで行われ、主にチェーンソーの使い方を学んだ。



もり 「森林」 を生かすまちづくり

市政懇談会で東城地域全体の課題として議論できたことで、このプロジェクトを具体的に進めていく計画が進み始めました。同年11月末には、このプロジェクトにいち早く取り組んでいる鳥取県八頭郡智頭町を視察し、その後も調査・研究を重ね、東城地域に合う形を検討。準備委員会を経て7月24日、東城木の駅実行委員会が設立され、8月1日本格的にプロジェクトがスタートしました。

委員長 表良則さんに、この事業に対する思いを聞きました。

木の駅プロジェクトは単なる林業振興の取り組みではありません 住民参加のまちづくりにつながる将来性のある事業です

荒れた山、寂しいまちなかを何とかしたい

現在の山は、戦後植林したままの状態が続いています。本来であれば間伐して木と木の間隔を空け、太陽の光が入る山にしないとダメです。植えたままの状態では、狭い範囲で多くの木が生えているので大きくなれませんが、草が生えず木の根が張らないので災害も起きやすくなります。また、木の根元や曲がった木はお金にならないため、除伐や間伐をしてもそのまま山に放置されていました。

それに加え、東城のまちなかは昔に比べ人通りが少なくなり、シャッターも閉まった店が増え、寂しい思いがありました。

ここから「森林を生かしたまちづくり」の発想が生まれたのです。これを進めるにあたっては自治振興区だけでなく、林業関係のメンバーを始めオール東城で事業を推進する必要がありますという事で準備委員会を立ち上げました。市政懇談会で提案し議論できたことで、市の支援を得られることになり、本格的に実行委員会としてスタートが切

れました。

皆で関わる住民参加型のまちづくりに

一般的には、山の仕事は大きな機械を設置して大規模に木を出していきますが、この事業では簡単に軽トラとチェーンソーがあれば、誰でも木を出荷できます。簡単に作業ができる程度の木を扱うので、高齢者でもできます。現に80歳を超えてもしっかりと木を切って出される方もいらっしゃるし、私自身勇気付け

られました。

そして、皆で作業に関わる形をシステム化したいと考えています。一人では難しいことも二人だとできますし、やってみようという気にもなります。住民参加型のまちづくりにもつながっていくものと思えますし、これをいかに浸透させていくかだと思っています。

8月1日にスタートを切りましたが、帝釈地域では山主さん以外の皆さんにも参加していただいで運搬を行ってもらいました。皆で、地域で、山を守っていく形を作らなければならぬので、登録者以外にも参加してもらおうことを考えていく必要があります。

人任せではなく、地域の山は地域で守る

今の山の作業というのは大きく分けて二つあります。一つは施業委託型。山主が依頼して森林組合や木材業者が木を買って出荷するので、山主はほとんど関わりません。そうすると山への関心は薄くなり、「業者に任せておけばいい」となってしまいます。も



東城木の駅実行委員会 委員長
表良則さん (66)

ビジョンを描き、強い気持ちで取り組む

今、都会の若者が山に関心を持つ、田舎で働きたいと言う記事をよく読みます。市が

う一つは自伐型林業といって、自分で木を切って自分で出荷する形で、現在は少数です。こうした自伐型の小規模林家を増やしていくのが、この事業の狙いでもあります。とにかく一過性のものでは終わらせてはいけません。将来的には地域の山は地域の者で守っていくという意識づくりも必要です。現実のものになるようにやっていかないといけないと思っています。

将来的には次世代の人が住むというビジョンを描きながらこれを実現させたい。そうした強い気持ちで取り組んでいきます。



横山正昭さん(69)
帝釈宇山

収入源として 魅力があります

これまで1ト当たり3千円だった木材が、倍の6千円で買取ってもらえるということで、収入源としてとても魅力です。里山券は確実に使うと思うので、町の活性化にも貢献できて、いい仕組みだと思います。

※地域おこし協力隊

地域活性化に取り組む人材を地域（市）の外から誘致する総務省の支援制度。活動期間は1年で、最長3年まで更新が可能。



地域通貨「里山券」。東城高校美術部の生徒が描いたイラストが好評

します。その後、出荷者はセンターで受け取る仕組みです。里山券のデザインは、地元東城高校の美術部の生徒の皆さんに描いてもらいました。なぜかと言うと、こうした関わり方をしてもらうことで、子どもたちにも木の駅プロジェクトを身近に感じてもらえるのではという思いがありました。木を切り出す人だけが関わるのではなく、なるべく地元の多くの方に参加してもらえらるよう、地元の人々が主役になってもらうことが大切だと思っています。

最終的な目標としては、山に関心を持って人、それを見た人、普段山に入っていない人でも木を切ってみたいと思ってもらえ、そうした声を増やしたいです。「素人山主」とプロの山主との接点を増やすことで底上げしていきたいです。何も山に入るのには林業のプロでなくてもいい、誰でも入れるんだよという認識が広がり、そこが増えていけばいいと思います。私は地元の間では無いので、あくまでもサポート役だと思っています。今後も出荷者や商店の方と話をしながら、自分ができることを最大限頑張っていきたいと思っています。

このプロジェクトに関心をお持ちの方は、ぜひお気軽にご連絡ください。

東城地域の取り組みを本市独自のものに発展させ、全市に広めていきたいです



林業振興課 森 繁光 晴 課長

この夏、東城地域で産声をあげた「木の駅プロジェクト」は、地域住民の皆さんの手づくりによる、新しい地域づくりの取り組みです。昨年9月の市政懇談会（東城会場）で、地域住民の方から「木の駅プロジェクト」の実施に向けた提案をいただきました。その後、精力的な先例地視察や会議など、準備を進められた関係者の皆さんの情熱は「すごい」と感じています。

平成25年3月に策定した「庄原市林業振興計画」では、「里山を生かす仕組みづくり」を基本方針のひとつとし、「地域や市民の参加による里山づくり」を掲げています。さらに、「庄原いちばん基本計画」では、「木の駅プロジェクト」を、「地域産業のいちばん」の取り組みとして位置づけ、木の駅プロジェクト事業に取り組む団体の設立や運営、木材の買い取りに要する経費に対して補助制度を創設したところです。このプロジェクトは本年度、東城地域での試行を通じて、運営方法の検証、課題や問題点の整理が行われる予定です。住民の皆さんと一緒に創意工夫を凝らし、ぜひとも本市独自の「木の駅プロジェクト」として発展させ、他の地域へも広げていきたいと考えています。

木の駅プロジェクトを進める上で、この人の力が大きいと言われる人物がいます。それは、今年4月からこのプロジェクトに関わっている門野淳記さん。地域おこし協力隊員（※）として地域活性化に力を注いでいます。

地元の人々が主役になることが大切です そのためのサポートをしていきたいです

東城木の駅実行委員会のお手伝いをしています。地元で考えられて始まったプロジェクトですので、それをしっかりと形にできるようサポートしたいと思っています。森林組合や林業事業者、商工団体などと連絡調整をとりながら事業を進めてきました。ポスターやのぼりといったものも作成し、住民の皆さんへのPR活動も行ってきました。プロジェクトがスタートして増えた業務が、出荷量の計算と里山券の換金です。出荷者は木材を木の駅に出された後、各自治振興センターに伝票を届けられますので、これを回収、計算し、数量に応じた里山券をセンターにお渡し



地域おこし協力隊員 門野 淳記 さん



里山券を利用して買い物する高尾要さん（左）

地域経済活性化に期待 加盟店増を目指します



東城町商工会 事務局長 藤原 富雄 さん

里山券による経済活性化への期待は大きいものがあります。小さきまぎある店舗の中で、特に小さな店舗が厳しい状況があるので、地域通貨が導入できればそうした店舗の支援になるのではと期待しているところではあります。

東城町内にある約520事業所のうち会員が320。そのうち里山券の取扱店は64店舗（8月21日時点）ありますが、まだまだ会員の中に浸透していないという点で、課題があります。我々の組織としての課題でもあります。加盟店が増えれば地域の人ももっと便利になると思いますので、この事業を知ってもらい、多くの会員に参加してもらうことで、加盟店が増えるようPR活動に力を入れたいと思います。

里山券を利用できる店舗は東城市街地が多いので、他の地域の加盟店増にも期待したいです。

●インタビュー



初めて里山券を利用した 高尾 要さん (80) =帝釈宇山=

山が好きでこれまでも木を切り出してきましたが、この制度でこれまで切り捨てていた木がお金になるので、頑張ろうという意欲が出てきました。振り込みではなく里山券という目に見える形で支給されるのがうれしいですし、通常の商品券と同じ感覚で使えていいですね。



魚長(うおちょう) 店主 長代和男さん (80) =東城=

まちの活性化につながるいい取り組みだと思います。父の代から70年続く鮮魚店ですが、お客さんの入りは多い頃に比べて3分の1にまで減りました。少しでも商売の足しになればと期待していますし、この取り組みを通じてまちづくりに協力していきたいです。